

第20回 とりかえはや物語

堀 内 守

いよいよ思われたからである。両者の対話の口調も變だつた。くわしいことは忘れたが、雰囲気からいって、北風は男性だったし、太陽も男性だった。

「どれ、こんどはぼくにやらせて『らん』などと太陽が言つていた。

この言い方が氣になつた。今にして思えば、「どれ」という接続詞は子どものことばではないようと思える。「じゃあ」とか「それじやあ」ぐらいではなかろうか。

「どれ」が変に思えたのは、近くの老婆たちが何かを始めるに当つて「どれどれ」と言うのがつづいたからである。「やらせて『らん』」も変だつた。この余裕ある口調は、最初から太陽の勝ちを予想しているように響かないか。勝負を競つてゐる緊迫感がないのではないか。初めから北風を呑んでかかるつているようだ。

いろいろ理屈をつけたが、いずれもその時ぼんやり感じたものをのちになつてからたどり返してのことである。一瞬そんなことを感じても、子どもはこういう物語にすぐに引っぱり込まれていく。

もうひとつ、子ども心にふしげに感じたのは、北風の方がせっかちで、太陽の方が^{おうよう}鷹揚なキャラクターになっていたことである。それは絵本の絵柄にもそつくり表わされていた。北風は黒っぽく、荒々しい。太陽は丸やかで、赤い。これでは最初から「勝負あつた」といった感じである。

対比の図

この対比は意外と古いのではないか。もともと、この物語がイソップ物語にあったとする、当然古いことになるわけだが、問題はこの「古さ」が現代にもそのまま存在するほど続いているところにある。

旅人が上着まで脱ぎ、汗をぬぐっているのを見て、太陽は北風に向かい何と言つたらいちばんよいのだろうか。

「ほら、ごらん、やつぱりぼくの勝ちだ」
「『』らんのとおりだ」
などと語るべきか。

それともニヤリと笑つて、含み笑いでもして、あるいは知らんぶりをしてうそぶくべきだらうか。

いろいろありうる。

それに応じて、北風の反応も変わつてくるのではない。

「なるほど、やつぱり君の方が勝つたね。ぼくはカブトをぬぐよ」

ああ、キザだ。いかにも子どもの会話に近づけているようでいて、こういう言い方はオトナのものである。こどもとはたぶんこういうものであると思ひ込んだオトナが書いたセリフである。

北風は黙すべきだらうか。それとも怒つて、その場から姿を消してしまうべきだらうか。

これもいろいろな場合がありうるわけだ。

オトコ・オントナ

ところが、明治初期の翻訳本を見ていると、話はだいぶ変わつてくる。

北風は力の隠喩のようなのである。太陽は愛の神の隠喩のようなのである。全体の文脈は、物語を楽しむとい

うよりは教訓調に近くなっているから、その間隙を埋めるためにこういう隠喩が必要になってくるのだろう。

面白いことに、この場合の北風は荒々しい男、筋肉の盛りあがった男——仁王さまのような顔つき——に描かれている。これに対して、太陽は福ぶくしい。これはどう考へても女神である。

この対比は天界が舞台になつてゐる。だから、何やら

スサノオとアマテラスの関係にも似てくる。天津罪を犯した北風は、勝負に破れて追放の運命にでも会いそうな凄い顔である。風は彼がわきにかかえている大きな袋から吹き出している。それを太陽はにこやかに見やつてい

る。

旅人は、地上の世界の人間だから、北風や太陽よりもはるかに小型に描かれている。彼が絵の中央に登場することはない。オーバーを脱いでいるのもページの片すみにおいてである。さし絵がそくなつてゐるのである。

北風や太陽の位置から、彼が上着を脱いだのを見下したような絵だ。

勝負に負けた北風のくやしそうな顔。それは見ようによつては憤怒の形相物凄く、といった感じにも見えるし、それまでの荒々しさが突然その強さを喪つて、ヘナヘナとなる寸前の転換点をあらわしているようにも見えるのだ。

これをどう解するかによつて、女神の表情も異なつて見えてくる。破れた以上、とつととその場を立ち去れ、といわんばかりに女傑然として立つてゐるようにも見えし、二度とこのような挑戦をするのではないぞとたしなめているようにも見えてくる。

親と子、姉と弟

かりに北風を親とし、太陽を子としてみよう。これは落語の世界に近くなる。生一本な親とこまちやくれた子の対称となろう。

北風が子で、太陽が親だとする。これでは物語の迫力

が出てこない。

ない。

北風と太陽とは、やはり何らかのつながりがありながら、一方が他方をともに必要とするような関係にある。

ばらばらだったら、この物語りは生じないからである。友だち同士でもダメであろう。

いろいろと仮託してみよう。

この北風と太陽の関係に類似したものを並べてみると

にする。

北風を孫悟空に置き換える、太陽をオシャカ様に置き換えてみる。宇宙の果てまで飛んでいったつもりの孫悟空

が実はオシャカ様の五本の指の中を超えることができなかつたとする話。あれと近似しているようにも思えてくる。

北風を厨子王に置き換える、太陽を安寿に置き換える。

森鷗外の『山椒大夫』におけるこの両者の関係は、しかるべき類似を示している。

安寿が男装を強いられることによって、厨子王といつしょに山の仕事を行くのを許されるというのも見のがせ

どもは風の子」という文脈が成立すると、北風まで小僧の表象をもつにいたるだろう。そして、ちゃんと「北風小僧」というニックネームと「寒太郎」という名前までちようだいすることになる。

もはや筋肉隆々ではなく、小鹿のようにすばしこく駆けめぐる仲間に加えられていくわけだ。

「小僧」は、ただ小さいだけの表象ではない。機敏であるのが特徴である。こういう点を考慮にいれると、北風と太陽の物語は、幾通りもの変移を続けていくといってよいようである。

「小僧」の表象を与えられたとたん、オトコ・オンナという根痕は消される。いや、背景にしりぞいてしまう。無性というよりも、中性に近づいていく。だから「寒太郎」は、一般には男の子のようでありながら、元気のよ

北風小僧

い、気つ風のよい女の子を包み込むだけのゆとりをもつていている。

メディアとしての旅人

旅人の正体は何だろう。商人のようでもあり、職人のようでもある。彼は荷物をもち、オーバーを着ていなければならぬ。この場合のオーバーは、彼のシンボルになっている。

旅人はオーバーをかたくあわせて、襟を立てる。北風が力をつくせばつくほどオーバーを脱ぐはずはない。当然のことである。

この物語において旅人は実験台の役割を演じてみせる。彼が依怙地になつたならこの物語は平凡なものに終わる。初めに北風が吹くからよいようなものの、初めに太陽が温かい日ざしを送り、彼にオーバーを脱がせたあとで、北風がびゅーびゅーと吹いたとしたらどうなる。

この旅人の、オーバーを脱ぎ、汗をぬぐつてている時の顔の表情は無表情ではない。暑さでふーふー言つている

のでもなければ、重いオーバーにうんざりしているのでもない。まずは心地よげに笑みを浮かべていなければならない。

カングれば、彼は太陽の予想したとおりに、いや太陽の期待したとおりに、につこりとオーバーを脱いでくれなければサマにならないのである。だから、実験台でありながら、このドラマにおいては重要な役割をなつてゐる。いうなれば、旅人が北風と太陽の賭けを生き生きとさせるメディア（靈媒）なのである。ほとんどセリフもない役割でありながら、パントマイムよろしく悠々とオーバーを脱いで見せる役まわりなのである。

ドラマとして見れば、旅人の方がシテになる。演技もそれだけむずかしい。

どこから来て、どこへ行くのか、この旅人の由来はさだかではない。たまたまそこに来たように、太陽と北風の賭けのことばが終わつたそのとき、ぴたりと姿をあらわさなければならないのである。しかも、観客には偶然そこを通りかかったように見せかけながら。

いようだ。

旅人＝赤ちゃん？
旅人を赤ちゃんだとする見解も成り立つ。この場合、

北風はイジワルな人、太陽は母ということになる——とすると平凡すぎる。ここは大岡越前の物語——実は中国あたりから渡来した物語をネタにしている——に出てくる実子の判別の話に近づけてもよろしい。

自分こそホントの母親だと名乗る二人の女が大岡越前
の眼前で子どもの手を引っぱるというあの話だ。ありそ
うもない話のようであるが、あの判決は意表をついてい
るから物語としては面白くなる。あの場合の子は、旅人
の位置とほぼ重なる。

ミルクと母乳
北風を人工のミルクにたとえ、太陽を母乳にたとえた
人がいる。

いろいろなたとえが可能なのだと驚く。しかし、この
ようなたとえをいいかげんに扱うのももつたない話で
ある。あの旅人はセリフなしだった。ということは、高
度なパントマイムによる演技を必要とするということであつた。

いい顔をしたね」などということになる。この場合の「い
い顔」とは、親の期待に応えるような表情に限りなく近
い

だれもがそう思っている。そこで子どもを育てること
の楽しみも生まれてくる。

北風と太陽の話にひきつければ、赤ちゃんがむずかっ
たり、泣いたりしたときにどうするか。北風のように向
かうか、太陽のように向かうか。この境目はかなりきわ
どいのではなかろうか。

私たちちは赤ちゃんや幼児の表情やしぐさから意味を読
みとる。それがことばを介すときもあれば、ことばが不

充分で、しぐさの方が雄弁に語つてくる場合もある。これらの中の解説はのつびきならぬ関係であることが多い。

北風は損な役まわりのようにも見える。なぜ「北風」でなければいけなかつたのだろうか。西風でも、東風でも同じではないかといふ人もある。しかし、前に述べたように、これらの風では、「北風小僧」のように、変身することができないのである。激しい、しるしつきの「北風」なるがゆえに、かえつて「北風小僧の寒太郎」とい

うように、土俗的な姿に変身可能だった。これとの対比において太陽は、やわらかな陽ざしとして意味をもつてくる。西風や南風との対比ということになると、太陽の役柄はおのずから変わらざるをえなくなる。だって、太陽はぎらつく太陽であることもあるし、逆に薄日の場合

だってありうるからである。北風と薄日では勝負も成り立たないだろう。

よく考えると、オーバーを脱がすだけでなく、上着を脱がせ、シャツも脱がせるような太陽だつてありうるのである。それなのに、それらが表に出てこないのは、北

風が力で勝負をしたからである。ちょうど、それとは正反対のところに太陽が位置づき、太陽の役柄は力と反対の表象であることを文脈上約束させられている。その期待にそつて太陽はやわらかに、しかもオーバーを脱がすだけのあたたかさで旅人に向かい合うのである。

話がうまくできっていて、余分な疑問を生み出さないようにはたらくのは、この対比がピタリときまつているからにはかならない。

だから、太陽と北風でなくとも、こういう対立関係にある存在ならば、その組み合わせで置き換えることもできるわけだ。

変換可能

ぎらぎらと照りつける太陽を一方に置き、他方にそよ風を置いてみよ。真夏の太陽に対するクーラーは商品名を「そよ風」とか「高原」とか命名されているのもうなづける。反対に、冬の寒い日、部屋の中の暖房装置の商品は「だんろ」だつたり、「暖」だつたりすることもある

る。

こうして、現代における「とりかえはや物語」の例にはこと欠かない。

ある次元では「北風」を「いじめっ子」と見なすこともできる。しかし、「北風」をなくしてしまい、すべてを「太陽」だけにしてしまうと、私たちの期待どおりに「よい子」ばかりになるかというと、そうではない。「太陽」だけになると、「太陽」自体が幾通りもの形相を生み出す。ぎらつく太陽になつたり、薄日の太陽になつたり。

むしろ、私たちは「北風」が、「北風小僧」に変身したりする可能性の方に目を向けるべきではないだろうか。そうなると、当然太陽も「金色夜叉」ぐらいにバランスをとつて立ちあらわれることになる。この辺のふしぎなしくみは、一方がつねに主役で他方が脇役というような関係ではなく、変動相場制のようにそれぞれの立場が交換可能であることを示しているのではないか。

さし絵

北風と太陽というイソップ物語のさし絵は、この辺の機微をあらわしている。短かい物語だから、さし絵画家にとつては大して困難な絵ではないようにも見える。ところが、さまざま（この物語に附された）さし絵を眺めて、見くらべてみると、さし絵を描くにはかなりの苦心が必要であったことがわかつてくる。

「北風と太陽」の原型をどうつかむか。これが第一の問題である。対等か。それとも、北風が一本氣で、せつかちであるのに、太陽が寛容で、「オトナ」である、といふようにとらえるか。いや、逆に、北風を魔性の物とし、太陽を神性なるものとすべきか。

第二は審美的要素である。右のような対立をロコツに表現せず、読者の理解度にふさわしく見映えのする絵柄に仕立てあげなければならないからである。フォークロア（民俗）風の、太々とした絵柄にするか、メルヒエン風の淡い絵柄にすべきか。

第三は、双方の「顔」の表情の描き分けである。オニ

とオカメ、オカメとヒョウ、トコのよう、さまざまな原型がある。観音さまと夜叉、仏と羅刹のごとき、あるいは春と修羅のごとき対照も掘り起こされるからである。

こうなると、さし絵のいかんによつて、この物語は深みを変えてくる。別の言い方をすれば、構成の緊密さが欠けてきて、その隙間から、いろいろな解釈が湧き起つてくるのである。

さし絵とは、本文を主とした本に補助的に附された絵

といふようなニュアンスを含んでゐる。しかし、それはことばの上の表層にすぎない。文章よりも絵の方が強い印象を与えることもありうるのだ。したがつて、さし絵は本文と離れ、自己主張をはじめる。あたかも本文は、写真に附された説明のことばのように従の立場になり、絵の方が主の立場に立つてしまつた。

かたなたのもの、もうひとつ世界がその間隙からかいま見られる。いかなる漠然たるものにせよ、非地上的な観念として立ちあらわれたり、超越的に見えたりするので、地表べつたりの現実主義の枠は揺らぎはじめる。

こうなると、「北風と太陽」という物語（ある本では「太陽と北風」というように順序までが文脈に従つて整えられているが）は、さまざまの撻や秘儀を含んだ怪談のようと思われてくる。

両者の対話のきっかけになつてゐるのは無聊のようでもある。退屈なのである。賭けによる無聊の克服。そのため選ばれた実験台が旅人。「実験台」は、なんよりものであるわけだ。

少々背すじが寒くなるような怪談が紡ぎ出されてくるような氣もある。

（名古屋大学）